

氏名	近石 哲		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第 218 号		
学位授与の日付	2017 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文の題目	現代地蔵民俗信仰論 — 祭祀諸相にみる地域的受容と展開の様式 —		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	佐野 賢 治
	副査	神奈川大学 教授	前田 禎 彦
	副査	神奈川大学 教授	安室 知
	副査	金沢大学 准教授	清水 邦 彦

## 【論文内容の要旨】

本論文は、国内において最もポピュラーな仏教民俗信仰である地蔵祭祀をその主な功德・権能である① 現世利益、② 死者（亡児）供養における地域的展開の諸相を信仰民俗誌の作成により提示し、その祭祀次第や内容に基づき、既成仏教（浄土真宗）の僧侶や民間巫者との関わりが現時点での地蔵祭祀の醸成や変質に大きく影響していることを実証的に論じ、現代社会における地蔵民俗信仰としてまとめたものである。

本論文は、第一部で地蔵信仰の教理的特質、歴史的展開を概括した後、第二部で、本論の中核となる各地域における地蔵民俗信仰の実態とその来歴を考察する二部 5 章立ての構成を取る。

第一章 現世利益の側面に表出する地蔵信仰では、地蔵の代表的民俗祭祀である「地蔵盆」を京都市内（北区）、京都府舞鶴市、宮津市、福井県小浜市の事例比較から考察する。「子ども」主体で子どもの「健全育成」の「現世利益」祈願が、少子高齢化等により地域住民に主体が変化する移相を祈願内容、祭祀組織の変化の側面から考察、盛衰の要因を指摘する。加えて、「地蔵盆」の伝播ルートは京都から小浜・宮津・舞鶴と推測されたとした。祭祀の実態比較から踏襲され伝承された側面と、一部内容が変容して地域性が表出した特徴がそれぞれ確認できるとした。また、地蔵盆の調査において、地蔵像の彩色習俗に「死者供養」の性格が認められるが、その起源については不明であるとした。

第二章 死者供養（特に亡児）の側面に表出する地蔵信仰では、青森県北津軽地方の賽の河原（川倉、今泉）の調査事例に基づき、死者（亡児）供養・地蔵・イタコ（民間巫者）の関係を論じる。川倉では「亡児一人／1 体の地蔵像を写真に似せて造立」し、仏事の時「死者との再会と対話」を「イタコ」を介在にして行う。民間巫者の存在が重要・不可欠な要素・条件である。一方、今泉ではイタコの減少から「死者供養」が希薄となり、寺側によるさまざまな「現世利益」の打ち出しとともに地域住民主体で霊場の存続を考え、民謡大会など商工会・行政の後援をうけ、催事の場として継続させている。「死者供養」の観念の変容にイタコの介在の有無が明確に表れた事例として提示する。

第三章 祭祀習俗の側面に表出する地蔵信仰では、地蔵像に彩色して「化粧地蔵」と呼称する習

俗を、盛行地域の北近畿地方（京都市、若狭、丹後、但馬、丹波、琵琶湖岸一周、大阪府下）を調査地とし、その分布・背景・彩色の形態・意味合いについて一覧表を作成、分析した。その結果、彩色の様相に一貫性はなく独特であること、その特徴から、彩色習俗は伝承（踏襲）と派生とに類別でき、流通ルート（例：丹後縮緬機屋業）との関係などから京都を中心（起源）として現在にみられる彩色習俗の近畿（中央部～北部）における東西南北方面の分布の理由が考えられるとした。

第四章 既成（教団）仏教との相関に表出する地藏信仰では、民俗色が薄いとされる真宗地帯、富山県南砺市と砺波市の「地藏祭り」では、主尊として「聖徳太子南無仏石像」を祀る。地藏菩薩を聖徳太子に見立て造立・安置することは、南砺市井波の井波別院瑞泉寺を中心にその信仰圏に濃密に分布・展開していることが確認される。太子信仰の普及は、瑞泉寺の「太子伝会」の絵解き法要が、「太子巡廻」として各地区で行われ、巡廻地区と太子像の安置地区の分布図を重ねると合致する。この地区ではさまざまな石仏すべてを「ゾーサン」（地藏）と認識しており、前提に地藏信仰の普及が考えられるとした。

第五章、終章 祭祀諸相にみる地域的受容と展開 一総括一では、仏教の菩薩である地藏信仰と地域の民俗信仰との間に介在する宗教者の在り方をめぐって、「現世利益」の観念から地藏盆の普及、「死者供養」の観念から亡児供養における宗教者の関与を考察した。祭祀・信仰の普及への宗教者の介在においては、地藏盆では稀薄であり、亡児供養では民間巫者の介在、浄土真宗との関係では真宗僧侶による介在が確認できた。

また、地藏信仰の地域別信仰受容から信仰受容類型（地域か個人の別）についても言及し、祭祀や信仰の時代的経過と伝承の継承という観点からは、変容を重ねたすえに衰亡する事例は在村、ムラで、新たな要素を取り入れ興隆を遂げる事例は都市部、マチでその展開が確認できるとした。

## 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、日本において最もポピュラーな仏教の菩薩、地藏菩薩を中心とした民俗信仰が現時点においていかなる信仰実態を示し、その背景はいかなるものかを地藏民俗信仰の盛行する地域の民俗信仰誌に基づいて分析、考察したものである。本論は全体的に現代に時間軸を設定したフィールド調査の成果を十分に生かした実証性が高い内容を示しており、章ごとに課題設定を行いその結論を明確に述べるなど構成もしっかりとしており、読みやすい体裁がとられていることをまず評価したい。

「坊主」（ぼうず）は日本語では僧侶を表すとともに子供、男の子を表す。その背景には地藏菩薩像のイメージがある。地藏像は僧形であり、この世とあの世を結ぶホトケであり、カミと仏の間にある子供の存在とも重なり、境界を守るカミと意識され信仰されてきた最も日本化した仏教の菩薩といえる。従来、地藏信仰に関しては仏教学はじめ浄土教史、民俗学を中心に個別報告も含め膨大な研究蓄積がなされてきた。地藏信仰の中心課題はいかに地藏菩薩が日本化し、ポピュラーな庶民信仰のとなったのかに尽きる。

そこで第一に、著者の「地藏民俗信仰」とした立場が問われる。地藏信仰も当然外来の仏教教理を反映しており、土着の民俗信仰との習合、「仏教民俗」として現時点での地藏民俗信仰を把握するとの視角は了解できる。しかし、その相関関係において外来の仏教と土着的なカミ信仰の神仏交渉史、通時的あり方に注目する「民間信仰」論、地域社会においての宗教・信仰の機能の意味付けを重視する共時的な「民俗宗教」論などの視角がすでに提示されており、筆者の立場は今一つ明確

さを欠く。一方、その間に介在した宗教者、浄土真宗の僧侶、民間巫者イタコの関与に関する調査報告の内容は、地藏民俗信仰の成立、醸成の条件に対し示唆を与えてくれるものであり、その整合性への説明が加わればその間を補える。

仏教サイドから見れば地藏信仰の日本的受容にあたって法然浄土教の登場、親鸞による地藏信仰の現世利益の強調は見逃せない。その点では、著者が調査対象とする富山県砺波地方での地藏民俗信仰における真宗僧侶の法話、絵解きにおける地藏信仰の解説についての言及が欲しいところである。一方、民俗サイドにおけるお地藏さんのイメージ、村はずれ、あの世との境に立つ石像、笠地藏などの昔話との接点に登場する地藏像と「ゾーサン」(地藏)の異同とその性格を知りたくなる。

第二に、筆者は地藏信仰の功德、役割を「権能」の語で表し、具体的には「現世利益」、「死者供養」をその二大権能とするが、地藏民俗信仰においてその性格は截然と分けられるのか、その根拠の提示が求められる。歴史的にも、鎌倉新仏教の各宗派では浄土宗はもとより曹洞宗、時宗系の聖は地藏信仰を「死者供養」に積極的に取り入れたとされる一方、「現世利益」として、田植え、病氣直し、戦勝など百姓、武士などの要求を取り入れ、今日に至る地藏信仰の来歴が中世期にあることが示されているからである。権能という語は仏教者側から民衆への上からの解説が想定され、仏教と民俗の相互交渉による民俗信仰の醸成とする立場にはそぐわない言葉使いであるといえる。

大きく以上の二点がさらに検討を求められる点といえるが、本論は、教理(宗教学) - 宗教者(歴史学) - 民俗(民俗学)の三者の視角を合わせ見る総合性をすでに有しており、それぞれの分野の研究蓄積の整理統合を求めることにもなる。これは言うは易いが、地藏信仰のように膨大な史資料、研究実績のある分野では望蜀の感を伴うが学説の展開のためにもできる範囲から取り組んでほしい。以下は個別的な指摘と今後の研究における注文、現代の地藏民俗信仰の可能性に対するコメントである。

・化粧地藏だけではなく神仏像に彩色する習俗は道祖神や田の神像にも見られるがその異同、さらに化粧や仮面などいわゆる「粧う(装う)」こととの関連、またその色彩、白色などには再生の意味などが込められているかなど、さらなる分析が望まれる。また、地藏盆における化粧地藏の前身が阿弥陀仏とする伝承、十三仏中の地藏菩薩のイメージなどを糸口に浄土思想の民間伝播における地藏信仰の位置づけも今後課題としてほしい。

・「地藏盆」の伝播に丹後縮緬の流通との関連性が指摘されていたが、十三参りの習俗が、京都西陣織一法輪寺一虚空蔵菩薩信仰と関連して伝わった類例もあり、その具体相を宗教者の動向とも絡ませでの追及が望まれる。

・イタコの関与の有無が津軽地方の賽の河原地蔵祭りの方向性に大きな影響を与えたとの指摘は首肯できたが、地域振興などの場面においてはどのような地藏菩薩の「権能」が考えられるのか、また、それは地元住民に受容される民俗的基盤を有するのか教示してほしい。

・地藏信仰の庶民化、民間信仰化において最も多様な展開を見せた江戸時代に淵源する「はやり地藏」信仰に関係して、今日の都市部における地藏民俗信仰として巢鴨のとげぬき地藏などを事例に一言し、本論でも言及して欲しい。

いずれにしろ、本論文は、日本の代表的民俗信仰の一つともいえる地藏信仰の解明に、その多くを現地調査による一次資料に基づき果敢に取り組んだ著者の熱意が各処に認められる論考である。

本論は、将来に望むべき点、改善点はあるものの、著者による地藏信仰に関係する民俗学・宗教学・歴史学方面の基本文献の読破、地藏信仰にかかわる史・資料の博搜、関係箇所への現地調査による諸資料の総合化とその分析が的確になされている労作といえる。

以上、地藏信仰の日本的受容の歴史的展開を概括し、その上でこの信仰の地域的展開の異同の意

味を分析し示した点は高く評価でき、博士（歴史民俗資料学）の学位論文にふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。